

『 義人はいない、ひとりもない 』

ローマ人への手紙 3章 9～20節

青木 信太郎 牧師

◆ 私は罪人

神はそのことばをユダヤ人に託してくださいました。その歴史においてユダヤ人は常に神様のおことばと共に歩んできたのであり、それは他の民族にはない優位性であり特権でありました。しかしそれはユダヤ人が優れているからではありません。ユダヤ人を選び、ユダヤ人に律法と割礼を与え、ユダヤ人におことばを委ねてくださった神のみを誇るべきでありました。でもユダヤ人は自らを誇り続けてきたのです。聖さにおいて優れている、勝っていると主張して来たのです。このユダヤ人の思い上がり、見当違い、本質からかけ離れた形式的な選民思想を指摘し続けてきたパウロは、今朝のテキストにおいて核心を述べます。

【9節 では、どうなのでしょう。私たちは他の者にまさっているのでしょうか。】パウロは敢えて問いを掲げ、そして直ぐに答えを示します。【9節 決してそうではありません。私たちは前に、ユダヤ人もギリシヤ人も、すべての人が罪の下にあると責めたのです。】パウロは1章18節から異邦人の罪とそれに対する神の怒りと裁きを説明しました。2章からここに至るまではユダヤ人の過ちや偽善を延々と指摘してきました。そして今朝のテキストでパウロが先ずローマのキリスト者たちと共有したかった結論に至るわけです。「ユダヤ人も罪人である。異邦人もユダヤ人もすべての人は皆、罪人である。」これがパウロが最初に確認して共有したかったことであります。ローマ書には「罪<ハマルティア>」という単語が84回出てきますが、ここで初めてパウロは「罪」という単語を用いています。ここで初めてユダヤ人は【罪の下にある】と明言しているわけです。注目したいことは、「“私たちユダヤ人は”他の者にまさっているのだろうか」とユダヤ人である自らを含めて強調していると云うことです。これは、ユダヤ人でありかつは厳格なパリサイ派律法主義者であったパウロ自身が自らの罪を示され、その罪と向き合っていたことの現われだと思ふのです。単に民族的な区別や視点で神の御前に皆が罪人であることを認めるということ以上に、ユダヤ人であろうとギリシヤ人であろうとどの民族であろうとも、ひとりひとりが、私が神の御前に罪人であることを認めるべきであることが教えられていると思ふのです。

◆ 既に示されてきた罪

そもそも聖書にこの様に記されているではないか、とパウロはユダヤ人が規範とする旧約聖書から幾つか引用しています。【10-12節】詩篇14:1-3の引用です。【愚か者は心の中で「神はいない」と言う。彼らは腐っていて忌まわしいことを行う。善を行う者はいない。(ひとりもない)】これは単に無神論を嘆く詩ではありません。不敬虔で邪悪な愚か者は、心の中で神を認めないことにして心行くまで悪事に走る。悪事を重ねながら神様を考えないことにする。そんな地上を天から主が見下ろしたとき、悟る者はいるだろうか。神を求める者がいるだろうか。口先では何とでも言うが、心は腐り切っている。すべての者が神から離れて行く。善を行う者はいない。だれ一人いない。パウロはこのダビデの詩篇を引用して、形式だけの口先だけのユダヤ人も異邦人と変わらず罪人であることは昔から指摘されていたと語ります。【13-14節】詩篇5篇、140篇、10篇の引用です。昨日の友は今日の敵という状況においてダビデは朝明けに祈りました。【詩5:8-9 主よ。私を待ち伏せている者がいますから、あなたの義によって私を導いてください。～彼らの口には真実がなく、心にあるのは破壊です。彼らの喉は開いた墓。彼らはその舌でへつらうのです。】またダビデは、よこしまな者、暴虐を行う者に取り囲まれていました。【詩140:2-3 彼らは心の中で悪を企み、日ごとに戦いを仕掛けてきます。蛇のようにその舌を鋭くし、唇の下にはまむしの毒があります。】詩

篇10篇の詩人は不敬虔な同胞イスラエル人からの脅威の中で神様に祈り叫びました。【詩10:1,7 主よ。なぜあなたは遠く離れて立ち、苦しみのときに身を隠されるのですか。～彼の口は呪いと欺きと虐げに満ち、舌の裏にあるのは害悪と不法です。】パウロが実に旧約聖書に精通していたことを窺い知ることができます。ユダヤ人は日ごとに祈り、律法を唱え、その口で神を褒め称えているようではあるが、その口のすぐ奥のどのの中ではどうだろうか？その舌の裏側ではどうだろうか？心の中は罪で満ちていることが昔から指摘されていたのです。【15-17節】立て続けにパウロはイザヤ書59章を引用します。預言者イザヤは神の御前におけるイスラエルの罪深さの様子をこう語りました。【イザ59:7-8 その足は悪に走り、咎なき者の血を流すのに速い。～暴行と破滅が彼らの大路にある。彼らは平和の道を知らず、その道筋には公正がない。】900年前に預言者イザヤの口を通して語られたイスラエルの罪深い様子は今も何ら変わらない。私たちユダヤ人の足は血を流すのに速く、平和の道知らないとのパウロの引用は、あのナザレのイエスを、バプテスマのヨハネを、ステパノを死に迫りやっったユダヤ人の罪深い現実を思い起こさせます。【18節】再び詩篇36篇を引用してパウロは結びます。【詩36:1 罪は悪者の心の中に語りかける。彼の目の前には、神に対する恐れがない。】神の御前でユダヤ人の心の中には間違いなく罪があることをパウロは指摘します。神を崇め畏れているようで、自らの罪を認めることがないならば、ユダヤ人には神への恐れがないと言わざるを得ないとパウロは断言するのです。

#### ◆ 律法の意義

最後にパウロは、ユダヤ人が神の選びの民として主張して握り締める律法の意義について明らかにしています。【19節】ここでパウロが言う「律法」とはモーセの律法に限らず、詩篇やイザヤ書を引用してきたように旧約聖書全体を指しています。旧約聖書で語られている言葉はその下にあるユダヤ人に先ず語られた言葉です。旧約聖書における神様のことばに自らを照らし合わせるとき、私たちは神の選びの民であり、救いの民であり、私たちは特別であると言えるのだろうか？私は義人であると言えますか？神様の御言葉の前にユダヤ人である私たちはむしろ、その口をふさがれているのであって、異邦人もユダヤ人も全世界が神様のさばきの前に為す術はないのですと、パウロは教えます。なぜ律法によってユダヤ人の口はふさがれているのか？パウロは決定的な答えを示します。【20節】「だれひとり律法を守り行うことは出来ない。神様のことばを守り行うことは出来ない」ということであります。【律法によっては、かえって罪の意識が生じるのです】律法を吟味すればするほど、神様のことばを噛み締めるほど、ユダヤ人も異邦人もすべての人は自らの罪の現実に直面せざるを得ません。イエス様は教えてくださいました。たとえ実際に罪を犯していないようであっても、心の中で密かに人を呪い、心とその目で姦淫の罪を犯し、人のものが絶えず羨ましく、自分のものにしたいと思い、そして嘘をついてしまう…。神のおことば、律法に照らし合わせるとき全ての人は皆「罪はない」ということは出来ない。律法は神の前に罪人であることを認識させるためにあるとパウロは教えます。

#### ◆ お勧め

なぜパウロはローマ書の最初に徹底的に「罪」について語ったのでしょうか。それは“罪の認識”なくして悔い改めは生まれえないからです。“罪の認識”がなければイエス様の十字架と復活は心に響いてこないからです。今日からアドベント(待降節)に入りました。一週毎にローソクに火を灯しながらイエス様のご降誕を待ち望みます。【わたしは世の光です。わたしに従う者は、決して闇の中を歩むことがなく、いのちの光を持つのです。】罪に満ちるこの世界は暗闇の世界です。神の御言葉である律法の前に私たち罪人の道は行き止まりです。しかし私たちを愛しておられる神様は光であるイエス様を与えてくださったのです。私たちは先ず自らの罪を深く思い知る必要があるのです。その罪の赦しがイエス・キリストの十字架と復活であったことを思い知る時、私たちは悔い改めへと導かれるのです。